社会福祉法人 狛江市社会福祉協議会
法人化50周年記念誌

狛江市社会福祉協議会　法人化50周年記念ロゴマーク

法人化50周年を記念して、狛江社協のマスコットキャラクター
「こまちゃん」をあしらったロゴマークを作成しました。
本記念誌のほか、記念式典や記念品などに使われています。

もくじ

挨拶…… P2

祝辞…… P3

狛江市社会福祉協議会とは？…… P4

地域福祉活動計画…… P5

取組みのご紹介

ささえあう福祉のまちづくり …… P6

その人らしい暮らしを支える …… P10

孤立しない地域づくり／
危機を乗り越える・危機に備える …… P13

多様な人が集う地域の居場所 …… P16

子どもから大人まで、
育みあうまちを目指して …… P22

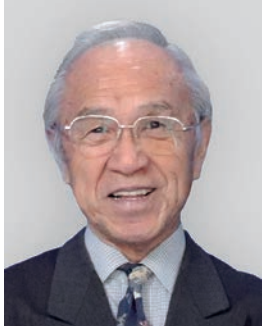
座談会…… P26

組織図・役員一覧 …… P30

10年のあゆみ …… P31

挨 拶

狛江市社会福祉協議会法人化50周年のご挨拶



社会福祉法人 狛江市社会福祉協議会　会長
髙木　光

狛江市社会福祉協議会は、昭和49年12月４日に社会福祉法人格を取得し、今年で50周年という記念すべき節目の年を迎えました。

50周年の佳節を迎えることができたことは、ひとえに狛江市をはじめ、東京都社会福祉協議会、狛江市民生委員児童委員協議会、町会・自治会など関係機関・団体、さらには多くの市民のみなさま方からの長年にわたるご理解とご協力の賜物であり、心から深くお礼申し上げます。

狛江社協は、狛江市制施行直前の昭和45年５月22日に設立された狛江町社会福祉協議会を母体として、当時前狛江市長であった冨永和作氏を会長に都内で59番目の法人社協として誕生しました。

法人化初年度の昭和49年度末の会員総数は648名、現在のあいとぴあセンター・西河原公民館の前身旧福祉会館の一隅に事務局を構えてのスタートでありましたが、３年後の昭和52年度末には、早くも会員総数が当初の２倍強に当たる1,411名まで増加し、同年度の東京都社会福祉大会において優良地区として表彰を受けるなど、狛江社協が急速に地域に受け容れられていった様子が窺えます。

この前年の昭和51年３月に、第２代会長冨永和作氏は“社会福祉は、国の制度や自治体の福祉サービスに加えて、地域住民のあたたかい福祉の心こそより肝要のものとされている。社会福祉に対する期待は、単なる金銭や物品の給付だけを求めるのではなく、一般地域住民の「愛の心」「助けあい」の精神であると認識する”と述べており、昨年令和５年度に策定した狛江社協地域福祉活動計画（令和６～11年度）の基本理念「一人ひとりが主役となって、誰もが安心して暮らせるまち～あいとぴあ狛江」にまで通底する“50年の地域づくり”の原点がここに示されていると考えます。

狛江社協は、この先の60周年、100周年とさらなる発展を求めて歩みを進めてまいります。今後ともみなさまの変わらぬご支援とご協力をいただきますよう心よりお願い申し上げ、50周年のご挨拶とさせていただきます。

むすびにこの50年を振り返り、今日まで狛江社協の発展に懸けた長きにわたる多くの先達たちの熱い思いやご労苦を思い、改めて尊敬と感謝の気持ちを表させていただくとともに、ここに50周年記念誌を刊行し、先達の偉業を記録に留め、今後の活動に向けて意を尽くしてまいる所存であります。

祝 辞

狛江社会福祉協議会法人化50周年に寄せて

狛江市長
松原　俊雄

狛江市社会福祉協議会が社会福祉法人化50周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

昭和45年に前身である狛江町社会福祉協議会が設立されて以来、貴協議会におかれましては、住民主体の理念のもと、地域の関係機関・関係団体と連携を図りながら、狛江の社会福祉の発展に取り組んでこられました。

昭和49年の法人化から現在に至る50年の間に、狛江を取り巻く社会情勢は大きく変化してきました。福祉制度についても様々な充実が図られてまいりましたが、同時に、公的支援のみでは解決が困難な課題も顕在化しました。

そうした中、貴協議会におかれましては、地域の福祉課題やニーズを的確に把握し、社会福祉事業経営者や福祉活動従事者等の皆様と力を合わせて課題解決に取り組まれるとともに、ボランティア活動や福祉教育の推進など、狛江の地域福祉の推進に多大なるご貢献をいただいております。その多年に渡るたゆまぬご尽力に深く敬意を表しますとともに、心より感謝申し上げます。

結びに、貴協議会のますますのご発展とご活躍をお祈り申し上げ、法人化50周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

狛江市議会議長
谷田部　一之

狛江市社会福祉協議会が法人化50周年を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

貴協議会は、昭和49年12月に社会福祉法人の認可を受けられ、これまで住民主体の理念に基づき、誰もが安心して暮らすことができる地域づくりに長年力を尽くされて参りました。

このたび50周年という大きな節目を迎えられましたのも、関係者、関係団体の皆さまのご努力の賜物と深く敬意を表し感謝申し上げます。

50年の歩みのなか、少子高齢化や情報化の進展などにより地域のつながりも希薄化するなど、地域福祉を取りまく環境が大きく変化し、地域が抱える課題や問題も多様で、かつ複雑化しております。

このような地域福祉の課題への対応は、公的サービスだけでは困難であり、また、住民相互の支え合い活動のみでも十分解決することはできません。

貴協議会におかれましては、地域福祉推進の中核を担う団体として、住民相互の支え合い活動の促進と公的サービスを結びつける取組みに引き続きご尽力賜りますようお願い申し上げます。

結びにあたり、法人化50周年を契機として、次の50年に向けて貴協議会のますますのご発展を祈念いたしまして、記念誌発行に寄せての祝辞とさせていただきます。

狛江市社会福祉協議会とは？

社会福祉協議会は、社会福祉法第109条に基づきすべての都道府県と市区町村に設置されている民間の福祉団体（社会福祉法人）です。「社協」という略称が使われることもあります。市民の皆様、社会福祉事業を経営する方々、福祉活動を行う方々との協働により、民間の立場から福祉のまちづくりに取り組んでいます。

狛江市社会福祉協議会（以下「狛江社協」）は、昭和45年５月22日に任意団体として設立され、その後昭和49年12月４日に社会福祉法人の認可を受けて法人化、令和６年には法人化50周年を迎えました。

事業の概要　令和6年12月現在

地域福祉課

地域総務係

法人運営の中心となる部署です。狛江社協の活動を支える会員事業をはじめとして、さまざまな地域のささえあい活動を展開・支援しています。

- 笑顔サービス P6
- 会員事業、協賛店事業 P7
- 募金活動
- ふくしえほん P24
- コミュニティソーシャルワーカー（CSW） P13
- 福祉カレッジ P22
- ふらっとなんぶ P16
- 生活福祉資金の貸付 P15
- 電話訪問活動（はとの会）支援 P14
- 意思疎通支援（手話・要約筆記・音訳） P11

市民活動支援係

ボランティア・市民活動を支える「狛江市市民活動支援センターこまえくぼ1234」を運営しています。

P8

相談支援係

主に高齢者の方に対し、住み慣れた地域で安心して生活を送ることができるよう、相談・支援を行っています（あんしん狛江は障がい者も対象）。

- あいとぴあ地域包括支援センター P12
- あんしん狛江 P11
- あいとぴあホームヘルパーステーション P12
- あいとぴあ居宅介護支援事業所 P12

サービス事業課

障がい支援係

障がいをお持ちの方に対して、仕事・生活・余暇等に関する相談・支援を行っています。

- 障がい者就労支援センター P10
- 障害者地域自立生活支援センター P10
- 特定相談支援・一般相談支援 P10
- 福祉有償運送（ハンディキャブ） P11
- ピアカウンセリング P10

早期療育係

成長がゆっくりであったり、アンバランスであったりする小学校就学前のお子さんを対象に、あいとぴあ子ども発達教室“ぱる”を運営しています。

P10

昭和53年 第1回福祉バザー

平成10年 第6回あいとぴあ会議

地域福祉活動計画

「地域福祉活動計画」は、民間組織である社協が活動計画として策定するものです。地域福祉の推進を目的として、社協が「すべての地域住民」、「地域で福祉活動を行う者」、「福祉事業を経営する者」に呼びかけ、それらの人々が相互に協力して実践的な活動を行うための計画です。

狛江社協では、令和６年４月に「第４次地域福祉活動計画」を策定しました。“５年後の『こまえのまち』をデザインするために、みつける力 つなげる力 新しいことをつくる・そだてる力で地域の思いをカタチにします”を合言葉に、以下の７つのチャレンジに取り組んでいます。

7つのチャレンジ

チャレンジ 1　地域のみつける力を高める

福祉教育を充実させることにより、住民のみつける力を高めます

チャレンジ 2　地域の財産を積極的に見つけに行く

住民の関心や興味を、身近な地域での活動参加につなげる取組みを展開します

チャレンジ 3　地域のつながる力を高める

避難行動要支援者が安心して生活できる地域をつくります
親しみやすいSNS等により、情報が活用できる環境づくりを支援します

チャレンジ 4　福祉にとどまらない地域の財産とのつながり、つなげる仕組みをつくる

身近に相談できる地域のネットワークをつくります
異業種との連携により、新たな活動領域を目指します

チャレンジ 5　新しい地域を「デザイン」する

地域をデザインするための課題集約・課題解決に向けた体制の構築を目指します

チャレンジ 6　新しい活動がわきあがる地域力を高める

新しい活動がわきあがるような起爆剤となる仕組みを検討します

チャレンジ 7　地域の力を高める存在を支え、そだてる

地域のことを考えて活動したい人を生み出し、支えます

取組みのご紹介

狛江社協はこの50年、地域の皆様とともに狛江の地域福祉活動を推進してまいりました。「ふくしのまちづくり」にご協力くださったすべての皆様に、感謝申し上げます。
直近の10年間を中心とした取組みを５つのテーマに分け、市民の皆様による活動も交えてご紹介します。

テーマ1 ささえあう福祉のまちづくり

狛江社協は地域福祉を推進する団体として、地域のさまざまな困りごとに対し、住民の皆様とともに取り組んでまいりました。多くの事業や取組みが、同じ狛江に住む人同士の「ささえあい」の精神により成り立っています。

笑顔サービス

高齢であったり障がいがある方の日常生活上の「ちょっと困った」を、同じ市内に住む方が支援する住民参加型の有償家事援助サービスです。支援を必要とする方は利用会員として、支援できる方は協力会員としてそれぞれ狛江社協に会員登録し、コーディネーターが両会員のマッチングを行います。提供する側・される側という枠組みを越え、ささえ合い・学び合いによる繋がりが生まれています。
活動の例：掃除・お買い物・洗濯・通院の付き添いなど

笑顔サービス会員インタビュー

利用会員 渡邊 アキさん × 協力会員 中山 マサさん

ー笑顔サービスに登録するきっかけはどんなものでしたか。

中山さん（写真左）：66才まで学校関係に勤めて、狛江のことは何もわからないような生活をしていました。仕事を終えて何をしようかなと始めたことの一つが笑顔サービスの活動です。チラシか何かが入っていて社協を訪ね、説明を聞きました。自分のできる活動が選べるので、比較的得意な料理や掃除の活動を積極的に引き受けてきました。
渡邊さん（写真右）：笑顔サービスに相談に行った当初は、病気のこともありとても落ち込んでいる時期でした。「全面的にお任せしたいわけではなく、私も動きたいの。だからそういう方を紹介していただきたい」と泣き泣きお願いした覚えがあります。しばらくして、コーディネーターの方から連絡があり「渡邊さんにぴったりの人が見つかりました」というんです。どんな方だろう？と思ったけど、お会いした中山さんが、本当にぴったりの人で驚きました。

ーお二人の出会いだったのですね。

中山さん：私も渡邊さんについて「一緒に掃除したいという方」と伺っていました。お会いしてみるとご本人は手が思うように動かせないのに、サッシの溝の掃除を一所懸命にされていました。訪問し二人でお掃除をするようになり、時には「こういう方法がいいよ」と教えていただきながら、その後で時間があればちょっとおしゃべりをして…という関係が長く続いています。
渡邊さん：それから13年も関係が続いていて、そんな方と出会えること、滅多にないですよ。中山さんに巡り会えたことが最高ですよ。
中山さん：何を話しても、本当に通じ合うのよね。相性がいいのね、きっと。

ー生活や気持ちに変化はありましたか。

渡邊さん：何をするにも辛い手足であることは変わりませんが、中山さんにお会いする度に元気が出てきます。「まだ頑張れる」そんな風に思えるんです。
中山さん：渡邊さんが常々努力していることも元気を保つ秘訣だと思います。けれど、そんな風に言っていただけて、私もとてもうれしいです。私自身も、人生の大先輩から教わる気持ちで、これからも活動を続けていきたいと思っています。

会員事業

会員とは、狛江社協が推進する地域福祉活動にご理解をいただき、財政的に支え、可能な範囲で参加してくださっている皆様です。

狛江社協が推進している住民同士の支えあい活動は営利を目的とするものではないため、会員の皆様からいただいた会費は、地域福祉推進のための貴重な財源となっています。

多くの個人、事業者の皆様に支えていただき、これまで活動を展開してまいりました。

会員の皆様に支えられてきた活動

災害時への備え
（狛江市災害ボランティアセンターの運営）

※災害ボランティアセンターについては
P15をご覧ください。

地域福祉活動や狛江社協事業の周知
（社協だよりの発行）

その他
- あいとぴあ助成金
- 福祉教育の活動

など

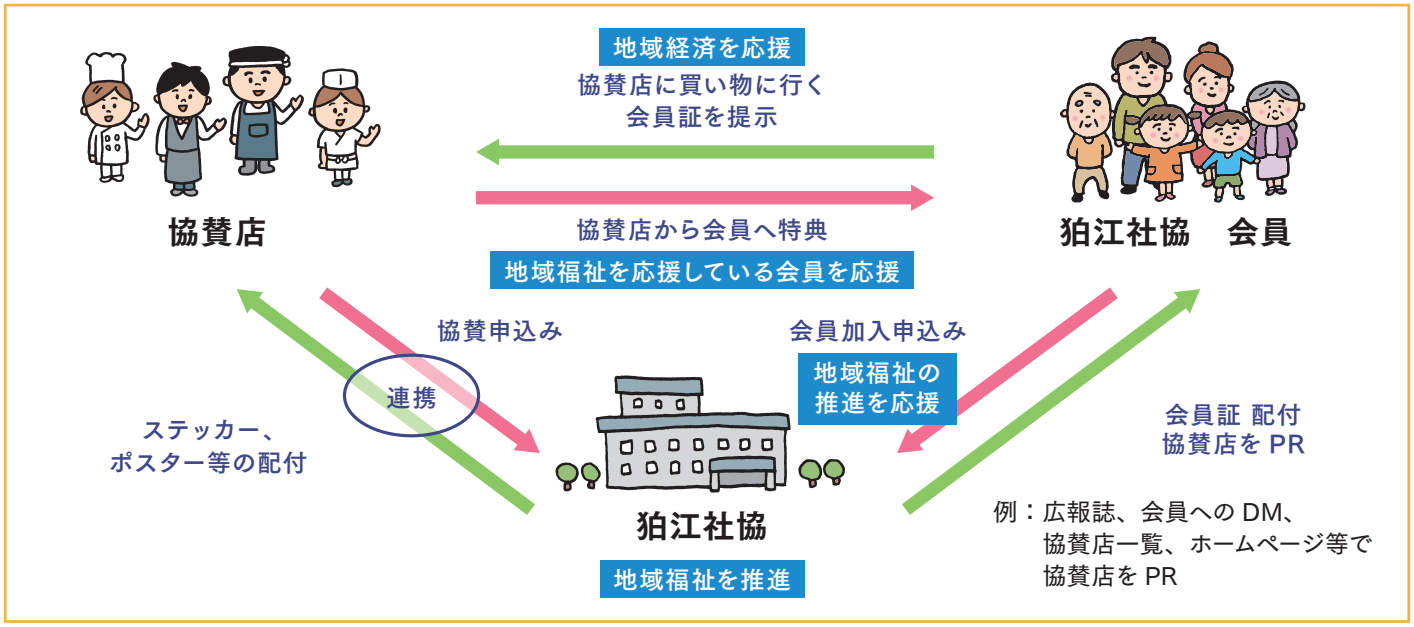
※ご入会は通年で受け付けております。詳細については狛江社協ホームページをご覧ください。

協賛店事業

協賛店とは、狛江社協と連携し、「狛江の福祉のまちづくり」を応援してくださる商店・企業です。この協賛店を利用する際、会員の方が会員証をご提示いただくことで、協賛店のご厚意による特典が受けられます。

商店や企業の皆様が地域福祉活動にご参加いただく事業として平成24年からスタートし、現在60件以上のご登録をいただいています。ぜひ狛江社協にご入会いただき、協賛店をご利用ください。

事業のイメージ図



狛江市市民活動支援センターこまえくぼ1234

狛江市市民活動支援センターこまくぼ1234（以下「こまえくぼ」）は、市民と行政による参加と協働のまちづくりを推進することを目的として平成28年に狛江市が開設し、狛江社協が委託を受けて運営しています。より良い市民生活のために、地域の課題解決に取り組みたい個人と団体を支援し、誰もが市民活動に参加できるよう環境を整え、市民が主体となる市民活動の文化を創るための事業に取り組んでいます。

情報発信

- 狛江市市民活動支援センター広報紙
  こまえくぼ1234（年11回）
- SNSホームページ
  LINE（登録者数403名）X（フォロワー 201名）
- コマラジ（フライデーアートサーカス）

ささえる

相談・情報収集 / 発信・
拠点・調査 / 研究 / 啓発

つなぐ

マッチング・ネットワーク・
交流（団体）・人材（団体）養成

市民活動団体
事業者
行政の協働
連携の推進

- 社会貢献事業所（CSR）75 事業所
- ごはんと居場所連絡会（平成 28 年～）

つくる

相談・情報収集 / 発信・
交流・人材（個人）養成・
研修

ボランティア活動への意識醸成

- 市民がつくる取材記事こまえがお（年 4 回）
- 体験学習　保育施設・小学校等への出前授業
- 情報発信のための投稿相談会

こまえくぼ1234応援隊

「もっと多くの市民にこまえくぼのことを知ってほしい」という思いから、開設5周年記念イベント実行委員会のメンバーが中心となり、こまえくぼ1234応援隊（以下「応援隊」）を結成しました。

ボランティアや市民活動に関心をもつきっかけをつくるため、事業所、市民活動団体、狛江市内10校のおやじの会と協力して、多くの方が来場する楽しいイベント「こまえくぼ1234フェスティバル」を開催するなど、こまえくぼの周知活動やイベントの企画運営に協力しています。

こまえくぼ1234応援隊のメンバー

隊長の細川伯允さんにお話を聞きました

5周年記念イベントの実行委員になるまでは、こまえくぼの仕事について詳しく知りませんでした。実行委員や応援隊の活動を通じて、市民の皆さんの希望を叶えるために頑張っていると知りました。イベントを通じて多くの人にこまえくぼを知ってもらい、気軽に足を運んでもらえるようになるといいなと思います。そして一歩踏み出す勇気を得て、何かしらの活動に参加してほしいと思いながら活動しています。

市民によるささえあいの活動

活動者インタビュー　私たちはここにいるよプロジェクト

：今西 千晶さん

アート制作に取り組んでいる障がい者施設の利用者の方の作品を募集して展示し、地域の方々に見ていただく活動をしています。

表現するということを楽しんでいらっしゃる方は多いと思うんですけれど、発表する場がとても少ないと伺いました。

最初は本当に私一人の立ち上げだったので、社協のCSWから興味がありそうな方に声をかけてもらいました。初めての展示会「ミチはここから展」を開催するにあたり、作品持ち寄り交流会というのをやったんです。その際、顔彩アーティストの福田泉さんが自分の作品を持ってきて、一緒に活動したいと申し出てくださいました。

地域の方に事業所でやっていることを知ってもらういい機会になったと思う一方で、アートに障がいの有無は関係ない、次はあえてパラと言わないアート展を目指したいと思いました。でも、その中心になるのは障がいのある方達。誰もが「ここにいるよ」と認め合って、共に歩んでいくっていう姿勢で、協力関係を深めていきたいと思います。

福田 泉さん(左)、今西 千晶さん（中)、六笠 良一さん(右)

～参加アーティストの想い～　福田 泉さん

上手も下手も関係なくみんなで取り組むプロジェクトに共感するものがありました。一人のスターを目指すんじゃなくて、みんなで輝けるものを作る。そこに上手いとか下手とかは関係ない。展示会で行ったワークショップでは、たくさんの色が重なってとてもきれいな作品ができ上がりました。

活動者インタビュー　NPO法人 にほんごしえん

：檜垣 寿子さん

主な活動は、土曜日に西河原公民館で行う『にほんごサロン』と平日の放課後に学校で行う『放課後支援』です。参加してくれるお子さんも親御さんも、せっかく日本に来たので楽しく暮らしてほしいと思っていて、遊びやコミュニケーションを大切に、支援する側も楽しんで活動しています。

最初は日本語を教えて話せるようになればいいと思っていたのですが、次第に行政等と協力しないと解決できない問題が出てきました。私は福祉について詳しくなかったので、こまえくぼを通じて関係機関に繋いでもらいました。現在はNPO法人になりましたが、以前のような任意団体ではなかなか受け入れてもらえない相手もあったと思います。こまえくぼがサポートしてくれているからこそ、行政等の関係者とも協力関係ができました。

にほんごしえんの活動から離れると、相手の言葉が分からないからと距離をおいてしまうような雰囲気が根強く残っているのを感じます。多文化共生とか難しい言葉が使われていますが、同じ地域の仲間として楽しく暮らすことを大事にしたいです。そのために、外国人の方々にも発信者となってもらい、一緒に地域をつくっていくことができたらいいなと思っています。

CSR（企業の社会的責任）としての地域参加

auショップ狛江店長　横山 健史さん

携帯ショップを運営していく中で、スマートフォンに関するお困りごとが増えていることを日々感じていました。CSR（企業の社会的責任）の一環として、社協のCSWと一緒に「スマホ大学」や「スマホ出張相談会」などの企画を開催し、延べ100名近い方にご参加いただきました。

私自身はこの業界21年目ですが、地域と密接にやりとりする経験は多くありません。特に出張相談会は初の経験で、右も左も分からずどうしたらいいかなと思っていましたが、CSWの協力もあって、どの会場でもスムーズに進行ができました。CSWが普段から関係性を作られている方が多く、とても和やかに一度もトラブルなく開催できたことは、すごくありがたかったです。狛江での経験を活かして、他店舗でも地元の社協さんと教室をやらせていただいています。

現在狛江では、福祉カレッジ修了生のボランティアさんと一緒に活動をしています。地域の輪じゃないですけど、スマートフォンの使い方で困っている人がいたら、電車の席を譲ってあげるみたいな気軽さで案内するのが当たり前の世の中になるといいなと思います。

携帯ショップって入りづらいと感じる人が多いと思うんですよね。「ややこしい話をされるんじゃないか」というイメージを払拭できる店でありたいと思っています。狛江店はオープンして3年になりますが、地域密着という言葉を弊社の代表がとても大切にしているので、狛江市で根付けるように地域貢献していきたいです。

テーマ2 その人らしい暮らしを支える

狛江社協では、子どもから高齢者までライフステージに応じたさまざまな福祉サービスを提供し、すべての人がその人らしく安心して暮らすことができる地域づくりを目指してきました。人生の様々な段階で人々が直面する課題やニーズは異なります。幼児期には発達支援や教育のサポートが重要であり、青年期には就学や就職に向けた準備が必要です。また、高齢期には健康維持や介護支援が求められます。これらの異なるライフステージに合わせた支援が提供されることで、その人らしい暮らしや社会に参加し続けることが可能となります。狛江社協では幼児から高齢者まであらゆるライフステージにいる多様な地域住民の相談に応じ、暮らし全般にわたるサポートを提供しています。この途切れのない支援の流れが、誰もが安心して暮らせる狛江市をつくる礎となっています。

ライフステージに合わせた支援

子どもの発達を促し家族を支える

あいとぴあ子ども発達教室“ぱる”

子どもたちが、安心した環境で遊びながら力をつけていけるような支援をしています。また、保護者が子どもの成長に合わせた関わり方ができるよう、支援しています。

障がい者の自立生活を支援する

障害者地域自立生活支援センター

狛江市内の障がいのある方やそのご家族が、悩んでいること、困っていることなどについて相談を受けたり、障がい当事者のやりたいことのお手伝いなどをします。

重度知的障がい者の社会参加と自己実現の場

生活介護事業所 麦の穂

平成8年に狛江市手をつなぐ親の会から引き継ぎ、28年に渡って運営してきた麦の穂は、令和6年4月から一般社団法人アイビーへ事業承継を行いました。

障がい者の働きたい・働き続けたいを支援する

障がい者就労支援センター

就労を希望する障がい者が、その能力を最大限に発揮できる職場につながるよう支援しています。また、職場定着や生活面のサポートを通じて安心して働き続けられるよう支援しています。

障がい者のやりたいことの実現を支援する

特定相談支援事業所・一般相談支援事業所

福祉サービス利用に必要な「サービス等利用計画」を作成しています。利用者が必要なサービスを円滑に受けられるよう関係機関との連絡調整を行い、その時々の状況に応じて計画の見直しや変更を適宜実施しています。これにより利用者が望む生活を実現できるよう、きめ細やかな支援を提供しています。

障がいを持つ仲間同士で支え合う

ピアカウンセリング

地域での自立生活実現のための支援として、障がい当事者によるピアカウンセリングを行っています。

これからの将来を支える

“ぱる”卒業生　桐 悠太さん

“ぱる”では、お母さんと一緒に手遊びや歌などの遊びをすることが楽しかったです。先生方は優しくて、卒業後も連絡をとることがあります。今は放課後等デイサービスを利用しています。年上の方になったこともあってスタッフのお手伝いに回る機会ができ、自分は役に立って嬉しいなと感じています。

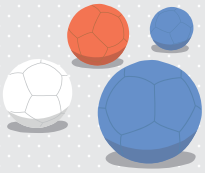
プライベートでは、移動支援を利用してボーリングに行ったり、秋葉原でアニメグッズを探しに行ったり、大学のオープンキャンパスに行ったりしています。スタッフさんは自分のやりたいことをやらせてくれ、行きたい場所に連れていってくれる頼りになる存在です。福祉サービスは利用するだけではなく、人との繋がりでもあると思っています。ずっと声優さんに憧れて、その関係の大学を目指しています。大学に通うために必要な福祉サービスを利用しながら、できるところは自立をしていきたいと思います。

自己実現を支える

身体障がい当事者　松本 裕子さん

私は44歳のときに、結婚を機に夫の実家がある狛江市に転入しました。現在は夫と二人暮らしをしており、日々の生活にはヘルパーさんや移動支援、訪問歯科、訪問リハビリなどの福祉サービスを利用しています。これらの支援は、年齢を重ねるにつれ、私にとって必要不可欠なものとなっています。日常生活をスムーズに送るためには、なくてはならないサービスです。

私には二つの大きな夢があります。一つ目はボッチャで日本一になること、二つ目は狛江市内の小中高校を巡ってボッチャと福祉について教えることです。夢に向けてこれからも頑張っていきます。最後に、私は狛江の障がい者の皆さんに、「やりたいことはやっていいんだよ」と伝えたいです。私たちは同じ人間だから、やりたいことはやろうよってね。一生懸命やればできるんだよ、足りないところはヘルパーさんに助けてもらって自分の夢をかなえていこう、そう伝えたいです。



個々のニーズに合わせた支援

障がい者や高齢者の移動を支える

福祉有償運送事業

現在、バスやタクシーなどの公共交通機関の利用が難しい約130名の高齢者や障がいのある方が登録しており、車椅子のまま乗車できる専用車両を活用して日常的な移動を支援しています。医療機関の受診や買い物など、生活の質を向上させるための重要な移動手段として活用されています。

必要な情報を得ることができるように支援する

手話・要約筆記・音訳

視覚障がい者には、文字や画像など目から入る情報を耳で聞こえる音声情報に変え（音訳）、聴覚障がい者には、耳から入る情報を手話や文字といった目で見る情報に変える（手話通訳・要約筆記）ことにより、情報取得を支援しています。音訳はボランティア団体の協力を得て、手話通訳と要約筆記は狛江社協の意思疎通支援事業によって行われています。

安心して地域で生活できるように支える

あんしん狛江

自分で金銭や大切な書類を管理することが困難な認知症高齢者や障がいのある方等に対し、福祉サービスの利用援助や日常的な金銭管理などを契約に基づいてお手伝いし、安心して生活が送れるよう支援しています。

情報取得を支える

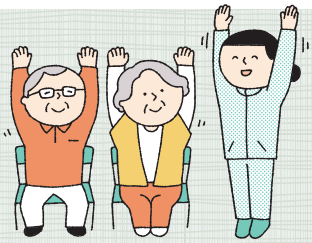
視覚障がい当事者　伊藤 聡子さん（写真左）、並木 ヒロ子さん（写真右）

伊藤さん：　結婚を機に狛江市に来て24年になります。今は障がい者団体の役員をしながら週に3日パートに出ています。ずっと以前は、広報こまえなどの情報はカセットテープで送られてきましたが、今はデイジー（CD）から情報を得ています。デイジーでは目次から聞きたい場所に飛べるようになり、便利になったと感じています。視覚障がい者は音声や点字で情報を得ることが多く、音声の情報提供はとても助かりありがたいです。

並木さん：　私は平成7年に狛江に転居して、29年になります。転入して数年後、視覚障がい者を対象とした卓球サークル「オレンジボール」やカラオケサークル「オレンジエコー」を立ち上げ、現在も月に一度、ボランティアの協力を得ながら活動を続けています。音訳ボランティアの方々が、図表や写真の説明の仕方を分かりやすく工夫してくださるのでありがたく、感謝しています。機械による音声化も進んでいる中、細かいところまでしっかり情報を伝えるという点では、音訳サービスは依然として貴重な価値のあるものと認識しています。

年齢を重ねても自分らしく過ごせるように支援する

高齢者の生活に関する相談を受ける



≪あいとぴあ地域包括支援センター≫

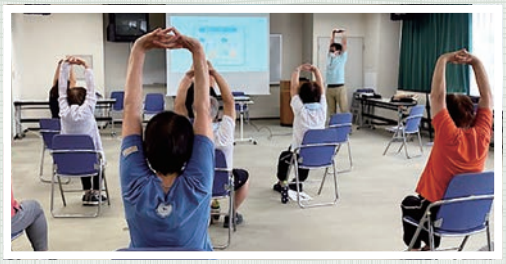
高齢者やその家族から、保健・医療・福祉に関するさまざまな相談に応じています。年齢を重ねても住みなれた地域でその人らしい生活ができるようにお手伝いをする、あいとぴあエリア（西和泉、中和泉、元和泉、東和泉）における高齢者の総合相談窓口です。

相談業務

介護が必要な高齢者等やその家族を対象に、生活全般の相談を受け付けています。また、高齢者の権利を守るための虐待対応、事業対象者や要支援の方のケアプランの作成、地域の介護支援専門員に対する支援や相談・研修等も行っています。

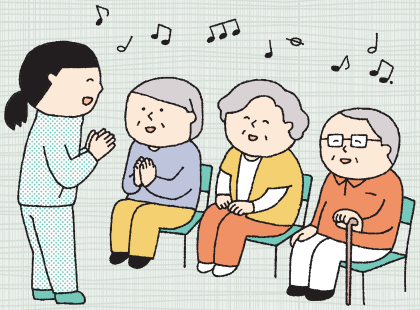
介護予防・生活支援体制整備事業

介護予防のための体操教室を開催しています。地域で活躍されている講師による転倒予防やウォーキング講座、ヨガ、太極拳など、多様なプログラムを提供しています。また、生活支援コーディネーターを中心に、集合住宅の集会所や自宅を開放しての居場所づくりなど、地域の高齢者が気軽に集える拠点づくりの支援をしています。



認知症予防事業

認知症になっても安心して暮らせる地域をつくることを目的に、認知症サポーター養成講座や家族介護者の会、介護者セミナー、認知症カフェなどを開催しています。



家事支援で高齢者の生活を支える

あいとぴあホームヘルパーステーション

「いつまでも住み慣れたわが家で暮らしたい」という市民の思いを支援するため、買い物や掃除等の家事支援のサービスを提供しています。また、地域住民の助け合いの輪を広げ、高齢者を支えていく体制づくりのため、狛江市認定ヘルパー研修を実施しています。

高齢者の自立した生活を支える

あいとぴあ居宅介護支援事業所

介護を必要とする方に対して、介護支援専門員が介護保険のサービスやさまざまな制度を利用できるように相談を受け、サービス調整をします。利用者のご希望に沿ってご本人らしく自立した生活をおくることができるようにケアプランの作成をいたします。

テーマ3 孤立しない地域づくり／危機を乗り越える・危機に備える

コミュニティソーシャルワーカー（CSW）の取組み

「CSW」は、今ある制度では解決しにくい困りごとを抱えている方に寄り添い、解決できるようにお手伝いをするとともに、地域づくりのパートナーとして住民の皆様のささえあい活動を支援する専門職です。個別支援、地域支援、仕組みづくりの３つを軸として、地域に出向いて様々な困りごとをキャッチし、その解決に向けて取り組むとともに、住民やボランティア、福祉関係者等と協力しながら、誰もが安心して暮らせる地域づくりを進めています。既存の制度で対応できない問題に対しては、行政をはじめ多方面に働きかけて、新たな仕組みを創出します。

住民と協働で立ち上げた映画会の様子

au ショップ狛江の協力で開催した出張スマホ相談会の様子

狛江社協のコミュニティソーシャルワーカー

狛江社協のCSWは、平成30年４月に最初の１名が配置されました。その後段階的に増員し、現在は地域包括支援センターの圏域と同じ形で、市内３つのエリアに１名ずつ配置しています。

個別支援の相談内容は、配置当初からひきこもりをはじめとした孤立・孤独に関するものが多く寄せられています。令和５年度は、個別支援として実人数131名に対し延べ1,282回、地域支援として実件数53件に対し延べ1,414回の対応を行いました。

また、令和５年３月には狛江市が駒井町に開設した多世代・多機能型交流拠点ふらっとなんぶの運営を狛江社協が受託したことにより、エリア内にCSWが常駐する新たなプラットフォームとなりました。拠点としての機能を活かし、利用者からの個別の相談を受けるほか、支援のつなぎ先のひとつとしても活用できるようになりました。

CSWが把握した地域課題は、福祉カレッジ修了生がベースとなり立ち上げた福祉のまちづくり委員会とも共有し、課題解決に向けた取り組みを検討しています。

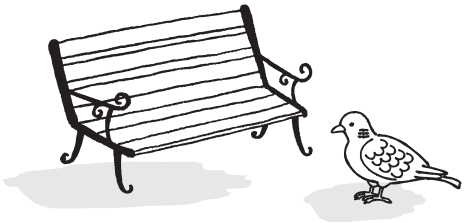
Check!

※CSWが関わっている活動は以下のページにも掲載されています

- わたしたちはここにいるよプロジェクト、CSR（企業の社会的責任）としての地域参加 …… P9
- コロナ禍の取組み …… P15
- ふらっとなんぶ …… P16
- 福祉カレッジ …… P22
- まなびや …… P25

孤立しない地域づくり／危機を乗り越える・危機に備える

CSW以外にも、狛江社協では地域の皆様と連携・協力し、孤立防止に向けた取組みを推進しています。地域住民同士の交流を促進するためのイベントやサロンを開催するほか、ボランティアの協力を得て安心して暮らせる環境づくりに努めています。これらの活動は、地域全体の絆を深め、孤立を防ぐ重要な役割を果たしています。



活動者インタビュー

狛江電話訪問はとの会：（写真左から）藤原さん、武田さん、石川さん、富田さん

「世の中から取り残されてしまっている人たちをつなぎとめたい」

はとの会では、孤独感の解消や安否確認を目的に、高齢や障がいにより孤立しがちな方々へ週2回電話をかける活動を行っています。現在は70から90代の利用者が多いです。当初は精神的な支えになることを目的に活動が始まりましたが、市内で高齢夫婦の孤独死が起きたことをきっかけに、安否確認の役割も担うことになりました。

コロナの最盛期は活動を休止するべきかどうか、活動者の中でも意見が割れました。ただ、私たち自身も近所の人とすらおしゃべりができない状態になってしまったことで、どれだけこの電話訪問が利用者の方たちの支えになっているかを強く感じました。

社協とは二人三脚という感じです。電話がつながらない方には担当のケアマネジャー等に連絡してくれたり、対応に困ったときには相談に乗ってもらっています。また、専門家が見た福祉の視点と私たちが考えていることを結びつけてくれます。

活動する上では、「世の中から取り残されてしまってる人たちとの関わりをつなぎとめていきたい」という思いをこれまでも持ってきたし、これからも持ち続けていきたいです。

活動者インタビュー

NPO法人フードバンク狛江：田中 妙幸さん

「困っている人をちょっとでも励ましたい」

田中 究さん（左）、田中 妙幸さん（右）

初めはほんの2世帯への食糧支援から始まった活動でしたが、市と協働するようになってからは、公平性を持ちつつ支援が増えていきました。福祉相談課からの依頼書を受けて、こまYELLの相談員の方が窓口でお渡ししています。コロナ禍には支援が過去最多の153件に上り、最近でもSOSがフードバンクへ入ってくることがあります。やはりコロナ禍前よりも厳しい状況が社会的にあるようです。

一方で、とにかく多くの食品が集まらないと成り立たない活動です。はじめて常設のフードドライブ（食品寄贈）ケースを置いてもらったのは、開設したばかりのこまえくぼでした。今では市内の社会福祉法人や地域センターなどの地域拠点に設置されるまでに広がっています。地域中に寄贈の場を作れたのは、狛江社協とのつながりがあったことが大きいと思っています。

私自身の活動のきっかけは、自宅のすぐそばのアパートに住む、ひとり親家庭との出会いでした。困っているお隣さんに手を貸すような、そんなフードバンクをやりたい。その想いが、食品寄贈してくださる方、賛助会員や寄付者、スタッフやボランティア…何百人に後押しされてここまでやってこられました。ちょっとでも励ましたい、お手伝いしたい、そんな思いを持ち続けています。

災害への取組み

狛江社協では、災害等への備えを強化するための取組みを行っています。

災害ボランティアセンターは、災害時に地域住民を支援するための拠点です。狛江市では、狛江社協が設置・運営し、ボランティアや地域住民の協力を得て、被害にあわれた方の生活再建に向けた支援を行います。令和元年10月の台風19号豪雨災害の際は、約100名のボランティアが活動しました。

また、こまえくぼでは、狛江消防署からの依頼を受け、市内の関係団体と協力し、聞こえない人・聞こえづらい人向けに災害対策について分かりやすく解説する動画を作成しました。

動画「聴覚障がい者の地震対策の基礎」の作製にあたって

こちらから動画をご覧いただけます

狛江市聴覚障害者協会　加藤 智差子さん（写真上）

動画制作の中で、ろう者と難聴者では理解しやすい表現が違うことが分かり、出演者の身振りやイラストの出し方についてみんなの意見をまとめて進めたのが印象的でした。

地震が起きたとき、健聴の人はカタカタという音が聞こえて揺れる前兆を感じるかもしれませんが、聞こえない人たちは分かりません。なかなか難しいと思いますが、簡単にわかるような工夫があるとありがたいです。

狛江市聞こえにくい人のふれあいの会　中川 眞一郎さん（写真中）

完成した動画は会の集まりで見ましたが、「こんなことが起きたらどうしよう」などと話しながら、みんな真剣に見ていました。私たち聴覚障がい者だけでなく、市民の皆様が防災について理解するためにも非常に良かったのではないかと思います。ただ、防災の常識は日々変わっていきますので、この動画を作っておしまいではないことを意識しておきたいです。

フリーカメラマン　高橋 義仁さん（写真下）

狛江市の動画制作に何度か携わっていた経緯から、この企画もお手伝いさせていただきました。制作にあたっては正確に伝わることが一番大事だと考え、必要な情報が見て分かる、見た人に通じるように撮影・編集したつもりです。

このような動画は多くの方にメッセージを伝える手段として最適だと思いますので、また同じような機会があれば、参加させていただきたいと思っています。

コロナ禍の取組み

コロナ禍においては、失業や仕事が減ったことで収入が減少し、生活の維持が困難になった世帯へ生活福祉資金の貸付を行い、合計9,421件の相談に対応しました。

また、住民同士の交流の機会が減ったことを受け、協賛店のコーヒーショップとCSWが協力し、屋外で密を避けながらコーヒーを楽しむイベントを市内２か所で開催しました。

〈工務店の作業スペースで開催したカフェの様子〉

テーマ4 多様な人が集う地域の居場所

現代社会では、通信技術や移動手段の発達により、共通の趣味や話題をきっかけとして地域を超えて他者とつながることが簡単にできるようになっています。その一方で、核家族化やライフスタイルの個別化が進み、地域住民同士のつながりが希薄化しているといわれています。特に都市部では、昔ながらの近所づきあいのような文化は馴染みにくく、地域の課題や困りごとが見えづらくなり、福祉の分野でも孤独や孤立をはじめとする複雑な相談を受けることが増えています。

私たちが経験した新型コロナウイルス感染症の流行は、人と人のつながりのあり方も見直す契機になりました。一人ひとりの暮らしの個別性を尊重しつつ、地域の中で世代や属性を超えて多様な人々がゆるやかに出会い、かかわり合う機会の必要性がこれまで以上に求められています。

居場所を求める背景は「一人きりになれる場」「誰かと知り合える場」「仲間と一緒の場」「誰かに求められる場」など人それぞれ異なりますが、多様な場所が近くにあることが必要とされています。

～多世代交流の地域拠点～

公設民営の多世代・多機能型交流拠点　ふらっとなんぶ

市内を地域包括支援センターの圏域と同じ形で３つのエリアに分けたとき、岩戸北・岩戸南・猪方・駒井町のこまえ苑エリアには他のエリアと比べて社会資源が少ないという課題がありました。そこで、狛江市が空き家を借り上げ、地域の住民が集えて相談もできるような場「ふらっとなんぶ」を令和５年３月に立ち上げました。その管理・運営について狛江社協が委託を受けて運営をしています。

ふらっとなんぶには、狛江社協のCSWや高齢者の相談に応じるこまえ苑の相談員、子育て支援を行う子育ての輪のスタッフも常駐しています。令和５年度１年間では約6,000名が利用されました。また、ふらっとなんぶの事業に協力してくださる市民の方には「ふらっとなんぶサポーターズ」としてご登録いただき、子どもの見守りや庭で育てている野菜・草花の手入れ、広報誌の仕分けなどのほか、ご自身の趣味を生かした講座開催などの活動をしていただいています。

活動者インタビュー

タルトタタン：田頭 知茉さん

市内在住の大学生が、高校生のための居場所の必要性を感じて始めた活動がタルトタタンの始まりです。居場所と同時に利用者の相談にも対応できるようにしたいとの依頼から、大学で心理学を学びカウンセラーの資格を持っている私がお手伝いで関わることになりました。その後、立ち上げた方がインターンや就職活動などでタルトタタンを続けることが難しくなってしまったのですが、せっかく始めた活動がなくなってしまうのは狛江にとって良くないかなと感じ、代表を引き継ぐことになりました。引き継ぎ後は、主に10代から20代の若者の居場所としてよしこさん家で2年ほど活動しました。昨年からはふらっとなんぶに場所を移し、対象も小学生から20代までの若者と拡大して居場所と相談の活動をしています。

子どもたちが興味のあることには日頃なるべく関心を持つようにしています。アンテナを広げて知識を入れておくと、会話に繋がるんです。そういう心がけを続けることで、普段学校の先生や私たち大人にはなかなか話していなかったような学校での些細ないざこざとか、ちょっとした悩みまで話してくれるようになりました。子どもたちの目線まで降りて話を聞けるように意識をしています。

相談してもらえるようになるまで、少し時間がかかりました。やはり我々のことも分かってもらったからこそ、気軽に話せるきっかけができたのだなと思っています。最近ようやく自分のことを名前で呼んでくれるような関係性になったので、これがスタートです。

ふらっとなんぶの１日

午前中から午後の早い時間帯は、未就学児の親子連れや高齢者、障がいをお持ちの方等がのんびりと過ごしています。健康マージャンやカフェのような室内の催しだけではなく、ウォーキングのような屋外活動も定期的に開催しています。

午後の下校時刻を過ぎると、近隣の小学生が続々とやってきます。コロナ禍以降、室内で友達と遊べる環境は貴重なようで、部屋に入りきらないほどの子どもたちが来ることもあります。時には、学年を超えてお互いに遊びを教え合うような微笑ましい光景も見られます。

週間スケジュールの例

詳細はこちらから
ご覧ください

月：フリースペース、こそだてのわ
火：フリースペース、こそだてのわ
水：子ども若者ルーム
木：フリースペース、こそだてのわ、ふらっとカフェ、健康マージャン
金：フリースペース、こそだてのわ、スタディルームふらっと（学習支援）

ふらっとなんぶのオープン当初からご協力いただいている2つの事業所にお話を伺いました。

就労継続支援B型事業所TODAY喜多見　柏倉 康一さん

TODAY喜多見は自主制作品として水引きレジンのアクセサリーを作っており、事業所に通っているご利用者様が地域貢献を図るコミュニケーションの場として、ふらっとなんぶで定期的に講座を開催しています。ご利用者様が講師役となって誰かに教えるという機会は、その方の意外な側面を知ることができます。地域の方の前に立ちますので、事業所内で事前に講師役の練習をしますが、試行錯誤しながら努力する姿がまたいいですね。

数年前、狛江社協の事務所でCSWと出会い、「地域で何か面白いことできないですかね」という会話から全てが始まりました。シニアの方に向けてちょっとしたお手伝いのサービスを作ったり、地域の障がい理解の活動に参加させていただくことにもつながりました。すぐに形にできないこともありますが、B型事業所として地域でどんなお手伝いができるのか、考える機会をCSWの皆さんから日々いただいているなと思っています。新たな地域の皆さんとの出会いがどんどん広がっているので、感謝しかありません。

多機能型事業所パザパ　髙宮 香菜絵さん

パザパは週3回の清掃と、毎週木曜日の午後にカフェをやらせていただいています。清掃は朝9時半からなので、就職を目指している方には決められた時間に出勤する練習になっています。ふらっとなんぶのスタッフや利用されている方とは「おはようございます」「失礼します、掃除をしてもいいですか」といった基本的なコミュニケーションをとりますが、パザパのスタッフ以外の人に声をかけることも仕事のスキルとして必要なので、その練習としてすごくいい場だなと思っています。カフェを始めるにあたっては、初めてお菓子を作るようになりました。作ったものを売りに来るという過程を通して、自分達が作ったものがどういう風に皆さんの手に渡るのかを実感するいい場だなと感じています。

狛江社協とは以前から就労支援の担当者を中心に繋がりがありましたが、CSWが配置されてからさらに広がり、地域に出る窓口が開けたと思います。福祉施設の商品だから買うのではなく、純粋に商品を見ていただいて買ってもらえるようなものを目指していますので、そこからこんな事業所があるんだなと知っていただけたら嬉しいなと思います。

多様な人が集う地域の居場所

～市民の手で運営されている居場所～

市内に初めてできた交流拠点　よしこさん家(ち)

よしこさん家は、平成31年に市内で初めて立ち上がった地域の交流拠点です。オーナーの自宅の一部を地域に開放し、「誰もが気軽に訪れることができる地域の居場所」を目指してオープンしました。現在は、よしこさん家の目的に賛同した複数の団体が、親子連れで気軽に立ち寄れる場づくりや、紙芝居や絵本の読み聞かせ活動、バザーなどの不定期イベントを開催しています。

市民発信の交流拠点　野川のえんがわ こまち

野川のえんがわこまちは「狛江を（coma）つなぎ（arch）、誰もが共に（co）歩む（march）ことのできるまちづくり」をコンセプトに、市民の有志が集まって令和２年にオープンしました。西野川にある昭和の空気を感じられる築50年の戸建てを活用した空間で、約10年間空き家だった物件をオーナーの厚意で借り受けて運営しています。

赤ちゃんを連れたママさんパパさん、学校帰りの子どもたち（学校に通っていない子どもも）、ご年配の方々など、何歳でも、障がいがあってもなくても、誰でもいつでもふらりと立ち寄れる「まちの縁側」を目指して地域に開放しています。

活動者インタビュー

野川のえんがわ こまち（運営団体：comarch）代表：梶川 朋さん

「誰もが気軽に立ち寄れる場をつくりたい」

令和2年の4月にオープンする予定で準備を進めていたのですが、想像もしていなかったコロナ禍を迎え、延期することになりました。最初の緊急事態宣言が明けて少し様子を見た後の6月中旬にオープンしましたが、やはりスタッフも葛藤しながらのスタートでした。

子どもの利用は初期からとても多かったです。コロナ禍で出かけられる場所が減り、夏休みもなかなか遠出できない中で、どうやら遊べる場所ができたらしいぞと子どもたち同士で口コミが広がり、令和2年の夏休み頃から小学生を中心に利用が増え始めました。それからこの4年間、こまちの利用者の半分ぐらいは小学生のお子さんです。

一方で、活動を始めてすぐの頃は高齢の方が足を運びづらい状況でした。昨年から、誰でも来られる「こまち食堂」を毎週水曜日に開催するようになったことで、徐々に増えてきました。上は100歳の方まで来てくださっていますが、2～3年前では考えられませんでした。こまちの活動が地域に定着してきたことで、高齢の方にも『ここなら安心して行ける』と思っていただくことができ、ご利用につながったのかなと思います。

運営していて感じる辛さはありませんが、難しさはたくさんあります。幅広い方の生きづらさとか困難に関わる現場ですので、その中にどれだけ専門性を発揮できるかというととても難しく感じます。ただ、こまちにいるときは近所のおじさんの中のひとり、高齢者の方から見たら近所の若い世代のひとりとして、やっていきたいと思っています。反対に楽しさもたくさんあります。ここに来てくれた人が笑顔で帰ってくれたらそれで1日良かったなと思いますし、一番嬉しいのはここで出会った人同士がこまち以外の場所でも交流を深めてくれることです。

これからは新しく何かを始めたい方のお手伝いをしたり、同じように居場所づくりをしている人たちでネットワークを作ってノウハウを共有したりすることにも取り組みたいです。この小さいまちの良さを活かして緩やかにつながり、困ったときには困ったということを発信できるまちであるといいなと思います。

～多様なニーズに応じた居場所～

サロン活動（小地域福祉活動）

サロン活動（小地域福祉活動）とは、近隣にお住まいの方々が協力して運営する住民同士の交流・たすけあい活動です。現在狛江市では、岩戸、猪方・駒井、野川の３地域と和泉地域内１地区で、ボランティア（地域福祉推進委員等）が運営する交流活動等が展開されています。狛江社協では、これらの活動に対して担当職員を配置し、運営の相談や支援を行っています。また、歳末たすけあい募金による配分金を活用し、活動資金を助成しています。

狛江市内のサロン

お茶のみ会（岩戸地域福祉推進委員会）

●毎月第２水曜日　岩戸地域センター

岩戸地域にお住まいの70歳以上の高齢者を対象に、歌やおしゃべりを楽しみながら交流を深めています。

おしゃべりサロン（猪方・駒井地域福祉推進委員会）

●毎月第４木曜日　南部地域センター

福祉に関する講話、ゲストによる演芸などを楽しみながら交流を深めています。毎年10月頃にはお楽しみ会として、ゲストの講演や中学生のブラスバンド演奏など毎年趣向を凝らした地域との交流イベントを行っています。

サロン野川（野川地域福祉推進委員会）

●毎月第４木曜日　野川地域センター

近隣にお住まいの方々が集まり、交流や学習、季節の行事などを楽しんでいます。ゲストによる講話や演奏、体操など毎回のプログラムは、ボランティアである推進委員が考え企画しています。

サロンいずみ（サロンいずみをささえる会）

●毎月第三木曜日　中和泉5丁目の個人宅

毎回ゲストを招き、演奏、朗読会、日本舞踊の鑑賞や生活情報を学ぶ講座などを行っています。お土産には手作りのお茶菓子もある、小規模で温かな雰囲気のサロンです。

活動者インタビュー

こまそぽ：杉本 かをりさん

「沢山の人に助けられたので、今度は自分が何かお手伝いする側になれたら」

自宅の一部を開放して、子どもと子育てを応援する「こまそぽ」をやっています。主な活動は、月に1回土曜日に開催するおもちゃの広場です。これは、芸術と遊び創造協会でおもちゃコンサルタントという資格を取った人が自主的に開催できる活動で、全国で展開されています。

私自身、３人いる子どものうち真ん中の子に障がいがあり、子育てで大変なことをたくさん経験しました。本当にいろんな人に助けてもらったので、私にも何かできることがあるんじゃないかと思い、ベビーマッサージの資格をとったり、保育園で子ども支援の仕事をしたり、保育士の資格を取ったりしてきました。そしてたどり着いたのが、おもちゃの広場です。

狛江社協の方にはたくさんお世話になっていますが、こまそぽを始めるときに『三つ折りのパンフレットを作るといいですよ』とアドバイスをいただいたのが印象的でした。他にもコマラジに出演させていただいたり、CSWには同じような活動をしている方々とつながるきっかけをつくっていただいたりしました。

これからの狛江は、一人ひとりの子どもに合った環境があり、その子らしさが育つようなまちであってほしいと思います。私も、親御さんたちがどうしようと戸惑っているときに、ひとりじゃないよと寄り添っていきたい。家族ではないですが、家族に近しいような、寄り添える存在になりたいです。

多様な人が集う地域の居場所

障がいをお持ちの方が自由に過ごせる場　障がい者フリースペース

障がい者フリースペースは、障がいをお持ちの方がいきいきと地域で生活していくために、仲間づくりや情報交換ができるよう、ゲームやおしゃべりを楽しむことのできる場です。自由に利用できるパソコンや、飲み物なども自由に持ちこむことができます。また、フリースペースの開催時にはピアサポーターが３名おり、当事者ボランティアも１名活躍しています。

ピアサポーターや当事者ボランティアは地域の仲間として、参加者が安心して自分らしく時間を過ごせるように取り組んでいます。

さまざまな障がいのある方が、お互いを尊重しながら遊び方や過ごし方のルールをつくり、ゆったりと自分の時間を過ごしています。

認知症の方やそのご家族が気軽に出かけられる場

認知症カフェ　KOMACAFE+（コマカフェプラス）

認知症の方やそのご家族、地域の方々、支援者等が気軽に集い、交流・相談ができる場として、市内の店舗等にご協力いただき、マルシェ併設型の認知症カフェを開催しています。ただ参加いただくだけではなく、認知症の方自身が得意なことを活かして活動できたり、地域の方に認知症について知ってもらえるような取組みを行っています。

食を通じたみんなの居場所　こまぱく

「食べる」ことを通じて地域の方とつながり、楽しく過ごすことのできる場で、毎月第4金曜日に狛江駅近くにあるこまえ工房の敷地内で開催しています。弁当・お菓子の販売と管理栄養士によるミニ講座を行うほか、月替わりで小物づくりのワークショップも開催しています。

つどいの場　みらい　cafeひといき

チームオレンジとは、住民や専門職など多様な認知症サポーターがチームをつくり、地域で暮らす認知症の方やその家族をサポートする新たな取組みです。

狛江社協が運営するあいとぴあ地域包括支援センター圏域では、毎週金曜日に中和泉にあるケアステーションMIRAIを会場に、毎週金曜日開催のcafeひといきが立ち上がっています。

食を通じた居場所支援（子ども食堂等）

子ども食堂とは、主に地域の団体やNPO法人などが主体となって、子どもやその保護者に無料または安価で食事を提供する取組みです。子どもの孤食を減らし、子どもが安心できる地域の居場所づくりと保護者への子育て支援を目的として実施されています。現在任意の団体が子ども食堂を運営しており、それぞれの地域で食事を通じた子供の居場所づくりに取り組んでいます。また狛江市内には、働いている大人を主な対象とした食支援活動に取り組む団体もあります。

狛江社協では、こまえくぼが中心となって「ごはんと居場所連絡会」の立ち上げを支援し、活動団体のネットワークをつくりました。また、団体によってはあいとぴあ助成金を交付し、資金面でも活動を支援しています。

活動者インタビュー

ハンズプレイス：竹林 伸子さん

「聞こえない人たちと市民をつなぐ居場所をつくりたい」

ハンズプレイスを立ち上げた一番の目的は、聞こえない人たちの居場所を作ることでした。はじめは月に1回高齢者のデイサービスを開いていましたが、「いつでも集まれる場があるといいね」という声がありました。同時に、デイサービスで提供していたお弁当が好評で、それだったらカフェとしていつでも誰でも集まれる場を開こうということで、和泉本町にハンズプレイスカフェをオープンしました。

聞こえない方は情報共有が難しく、面白い話題でも置き去りなってしまい寂しさを抱えがちです。聞こえる方の中には「聞こえないというのはどういうことなのか」が分からない方が少なくないようです。そこで、一緒におしゃべりしながら、コミュニケーションの方法や特性を知ってもらえるといいと思い、聞こえる・聞こえないにかかわらず来られるようなお店にしました。

近所の方も居場所としてたくさん使ってくださっていて、ここで初めて手話を知ったという方や、手話に興味を持ってくれているお子さんが来ることもあります。来店をきっかけに手話講習会や手話サークルに通うようになったという話も聞き、広がりを感じています。

聞こえない方に対しては、最初は愚痴のようなお話を聞くことしかできなかったのですが、話していくうちに相談ごととして受け止められるようになり、つながることが大切と気づきました。一般的な高齢期の問題は耳にすることも多いと思いますが、聴覚障がいを持つ高齢者の方も同じような問題に直面します。しかし、障がいによってなかなか自分の思いが福祉の支援者に伝わらない苦しさがあります。今は、カフェで聞こえない方の困りごとを聞けば、地域包括支援センター等につなげるようにしています。

カフェとして次に引き継いでくれる方がいればいいですが、難しければ福祉関係の事業につないで行けるといいと思っています。

テーマ5 子どもから大人まで、育みあうまちを目指して

いま住んでいるなじみあるまちの中にも、生活上の困りごとを抱えて暮らしている人がいるかもしれません。それは自分と無関係なことではなく、いつか自分や自分の大切な人が同じように直面する困りごとかもしれません。そんな身近な地域にある課題について知ることは、まちづくりに参加する第一歩です。狛江社協では、地域共生社会の実現に向けて、地域参加の入口である学びの機会を創出し、住民同士が共に考え解決へ向けて取り組むための仕組みづくりを行っています。

また子どもたちが、障がいのある人や高齢者を含めたさまざまな人の暮らしや文化に触れることで、思いやりの心や生きる力を育む福祉教育にも取り組んでいます。

福祉カレッジ

地域福祉を推進するためには、公的なサービスだけでなく住民の力が必要不可欠です。近年、地域における課題が複雑化・多様化する中で、その必要性は一層高まっていると言えます。

狛江社協ではCSWが中心となり、平成30年から、住民が集い・語り合い・学び合う場として「福祉カレッジ」を企画・開催してきました。

講義では、障がいを持つ当事者の方や地域で福祉事業に従事する職員、活動者の方を講師に、身近な話として地域課題を知り「共に生きるまちづくり（＝地域共生社会）」について学びを深めます。カリキュラムの内容は毎年検討を重ね、例えばコロナ禍における生活困窮、地域に住む外国人の現状と多文化共生など、そのとき地域に実際にある課題についても取り上げてきました。また、一方的に講義を聴くだけではなく、グループワークやフィールドワークを通して学びを深め、受講生同士が共有していくことも大切にしています。

最終的には受講生それぞれが狛江市における地域の現状を踏まえ、解決に向け取り組みたい課題と実践を「私が地域のためにできること」として企画にまとめ、発表し合います。この企画はこまえくぼでの展示という形で地域に対して提案され、実現に向けたアクションにつながっています。

受講生からは「知ることができたのは本当によかった。自分は地域の中でどのような役割ができるだろうかと考えるようになった」といった感想が聞かれました。令和６年度からは、基礎講座、ステップアップ講座の２コース制にリニューアルしてスタートしています。

福祉のまちづくり委員会

福祉カレッジの修了生が中心となって、令和３年度に「福祉のまちづくり委員会」が組織されました。身近な地域で共に生活する住民同士が、相互のやり取りを通してその地域の課題を発見・共有し、解決に向けた取組みを進めています。

和泉手つなぎ会　中和泉・西和泉・元和泉・東和泉（あいとぴあエリア）

福祉カレッジを修了し、地域でさまざまな活動をされている方が主要メンバーとなり、令和4年1月から活動しています。2か月に1回のペースでエリア内にある拠点に集まり、和気あいあいとした雰囲気で地域課題についての話し合いをしています。防災に関するフィールドワークや地域のボランティアイベントへの参加など、地域の生活課題に即した活動を展開しています。

いこいねっと　岩戸北・岩戸南・猪方・駒井町（こまえ苑エリア）

福祉カレッジ修了生のほか、PTAやおやじの会などで活動する方々が参加し、令和3年8月から活動しています。2か月に1回地域センターに集まり、グループワーク形式で地域課題とその解決方法を検討しています。防災をテーマにした住民向けのスマホ教室や、地域情報を子どもとその保護者に発信する「子どもと保護者のいこいマップ」の作成等、具体的な取組みを進めています。

のがわのわ　和泉本町、東野川、西野川（こまえ正吉苑エリア）

福祉カレッジの修了生で世代や経歴も異なるメンバーが集まり、令和4年1月に発足しました。エリア内の拠点に月1回集まり、アットホームな雰囲気で活動しています。話し合いだけではなく、まち歩き等のフィールドワークに取り組むこともあります。令和5年度には、エリア内の住民を対象に買い物に関するアンケート調査を行い、得られた情報や住民の意見を報告書としてまとめました。

修了生インタビュー

「地域とつながり、居場所ができた」　福祉カレッジ６期修了生：萩原 豊さん

定年退職後、終活について調べていくうちに社会福祉協議会を知り、相談に行きました。話を聞いて公的な制度についての理解は深まったのですが、同時に「地域とのつながりを持っておくことも大切です」というアドバイスとともに、福祉カレッジを紹介されました。確かに地域とのつながりを全然持っていなかったし、いつか福祉サービスを受ける側にもなるので、これを機会に勉強するのは意味があると思い受講しました。

修了後は、「野川のえんがわ こまち」や「NPO法人えるぶ」など合わせて4つほどの地域の活動に参加しています。

「自分の老後のために」というある意味で利己的な動機で始めたので、ケアとか利他とかって結構ハードルが高いと思っていたけれど、活動する中で気づくこともあります。たとえば、「こまち」では食を提供する活動の時にご飯をよそうんですが、必ず「このくらいの量でいいですか」って確認するんです。これは相手のことを大切にしたり尊重することだから、それくらいならあんまり深く考えないで自分にもできるかなと思ったりします。

「えるぶ」では障がいがある人が活動していますが、家のすぐ近くで横を通ったこともあるのに、こういう場所があって障がいがある人が身近にいるということを知らなかった。利用者の方と一緒にクッキー作りなどを楽しんでいるだけですが、自分がいることでスタッフに多少の余裕ができるのなら、それでも良いのかなと勝手に思っています。「こまち」や「えるぶ」は世代や事情の異なる人々の居場所となっていますが、そのお手伝いをすることで自分の居場所ともなっています。どうしても世代とか属性によって分かれやすくなってしまうけれど、狛江は多様性があって多世代交流が自然に行われるようなまちであってほしいなと思います。

５歳児へ贈る　ふくしえほん『あいとぴあ』

狛江市内の保育園幼稚園等を通じて毎月配付される、ふくしえほん「あいとぴあ」（以下「えほん」）。毎月１シート２ページが届けられ、一年間で１冊の絵本が完成します。各シートにはテーマがあり、手話や車椅子、狛江のまちや外国の文化など多様な全12のテーマを取り上げています。

自分にとって身近なこととして捉えることができるよう「あいちゃん」と「ゆうくん」という５歳児を主人公に、２人と一緒に考え、学べるストーリーになっています。

えほんは、各園でテーマについて話題にしたり、体験的な機会を取り入れたりして活用されています。例えば、手話や点字に関するテーマでは、市内の手話サークルが園を訪問して簡単な挨拶や手話の歌を覚えたり、リサイクルのテーマでは廃材を使った制作や市内のリサイクル施設を見学をするなど、その時の子どもたちに合わせて取り組んでいます。

発刊から30年以上経つえほんは、内容がその時代の社会や地域、子どもを取り巻く環境に合わせたものとなるよう、「福祉えほん活用委員会」にて検討と改訂が重ねられてきました。また、担当職員研修会の開催や、重点的に取り組んでいただく福祉教育研究園の指定を通して、園での活用がより豊かなものとなるよう取り組んでいます。

福祉えほん活用委員会：豊島 秀臣 委員長

最初のえほんの発行から関わらせてもらっています。当時の私は幼稚園の園長先生の中で唯一の若造でした。あの頃に発行されたえほんを手にした子どもが、40歳近くになっているなんて驚きです。

就学前の子ども達に「福祉」をどうやって伝えていったらいいんだろうと考え続けています。５歳児は、ストーリーや絵、写真から想像することができて、そのテーマと体験が紐付いて実感できる年齢です。この「体験」がとても重要で、日常生活にはいろんなことを知るチャンスがたくさん転がっているんです。えほんはあくまで入口で、それを教え込もうとしなくても、自然に園の活動と織り交ぜながら伝えていくことが大切だと感じています。

子どもたちには、この取組みを通して見たこと、味わったことを少しでも彼らの持っているポケットにしまって、そんなポケットをたくさんたくさん作っていってほしいなと思います。そうして成長していき、誰もが声を交わし助けあえるまちに狛江が発展することを願っています。

活動者インタビュー

「子どもたちに昔の遊びの楽しさを伝えたい」

伝承遊びの会：岩間 正隆 さん

子どもたちに昔の子どもたちがどうやって遊んでいたのかを知ってもらいたいという思いで、けん玉やこま、お手玉、あやとりなどの遊びを楽しみながら、多世代の交流を深める活動をしています。コロナ禍の影響を受けながらも、地域センターや公民館での活動から始まり、学校の授業等でも伝承遊びを伝えるようになりました。主な対象は小学校低学年の子どもたちです。今の子どもたちはどうしてもゲーム等で遊ぶ時間が多いので、それだけじゃなくて手を使った遊びを経験してもらえたらという思いから始まっています。

学校には、けん玉もあるしこまもあるんですよ。でも、使い方を教えられる人が少ないから、子どもたちは遊べない。学校の時間は限られているので、そのことに十分な時間を割くことも難しい。私たちがそれを教えることで、自ら楽しむということの重要性を伝えています。たとえばけん玉でも、技をひとつできるようになると興味を持って続けられるんですよね。1時限の中でけん玉、こま、お手玉、あやとりの4種類を体験してもらうことは大変ですが、一緒に楽しむことで元気をもらっています。

学びを支える“体験”～こまえくぼ ボランティア体験イベント～

こまえくぼでは、長期休暇を利用してボランティア活動に参加できる「夏のボランティア体験」を平成28年から実施してきました。子どもから大人まで参加することができ、毎年、市内の福祉施設、市民活動団体など、参加者が興味を持った場所で体験的活動をしています。令和２年は新型コロナウイルスの感染拡大により中止となりましたが、令和３年からは企画内容を見直して再開しています。例えば、視覚障がい者や聴覚障がい者と触れ合う体験では、こまえくぼが制作した障がいについて学べる動画を活用し、活動が制限される中でも体験を止めない取組みを行ってきました。令和５年からは、体験の機会を増やすため夏と冬の年２回開催しています。

本イベントへの参加をきっかけに福祉に興味を持った学生や、自身の健康維持と学びのために活動を継続する方もおり、狛江にボランティア・市民活動が根づくための大きな役割を果たしています。これからもさまざまな体験を通じて、ボランティア・市民活動が活性化できるよう取り組んでいきます。

「放課後の子どもの居場所づくりや地域教育を広めていきたい」

まなびや：宮田 葉月 さん

学生時代から地域教育の場をつくってきた経験があったので、この地域でも地域教育の場を作ろうと思い、「まなびや」を始めました。

地域教育では、実践的な学びの機会を得られることで考察力やコミュニケーション能力が育まれたり、お金の使い方を考え計算をしたりいろいろな科目を横断しながら実際の社会の中で学べるところが魅力だなと私は思っています。地域に出るといろいろな人がいて、いろいろな見方でその子を見てくれるので、子どもの自己肯定感にもつながることが期待できます。

活動場所を紹介してもらうところから社協のCSWにお世話になっています。最初はよしこさん家で放課後の居場所づくりや学習支援を始めましたが、活動を進めていくうちに来てくれる子どもたちの人数が増えたことなどから、現在の場所に移転しました。場所選びは、子どもたちの関係性を大事にした上で、CSWと一緒に行いました。

令和６年度は狛江市や民間の補助金をいただきながら、子どもの学びの機会を企業や事業主と共に協働でつくる事業にチャレンジしています。また、自主事業によって自立できるような団体にしていきたいという気持ちがあります。仲間もだんだん集まりつつあるので、学校・地域・企業などさまざまな人たちと立場を超えて協力し、子どもの育ちや学びに優しい社会づくりに貢献したいと考えています。

座談会

“一人ひとりが主役となって誰もが安心して暮らせるまち”を目指して

ー50周年という大きな節目に、幅広い活動をされている多様な世代の皆さんにお集まりいただきました。これまでの狛江について相曾さんにお伺いします。

【相曾】あいとぴあセンターがまだ福祉会館という名前だったころ、昭和63年に初めて狛江社協に伺いました。当時、女性の仕事はおおむね35歳で定年になるのが当たり前の時代でした。私は55歳くらいでしたが、福祉関係なら何かできることがあるんじゃないかと思って相談に行きました。何かお手伝いすることはありませんかと聞いたら、当時の職員さんに「そこに座っているだけでいい人になってください」と言われたのが印象的です。そして声のボランティアを紹介していただき、活動を始めました。

相曾 治子さん

視覚障がい者に向け広報こまえを読み上げて音訳する「狛江声のボランティアグループ」で長年活動しています。電話訪問はとの会、サロン野川、地域包括支援センターこまえ正吉苑のさくらカフェでもボランティアをしています。

ー当時はボランティアという言葉も世の中に浸透していなかったのではないでしょうか。

【相曾】おっしゃるとおりです。平成７年の阪神淡路大震災でボランティアが注目されて、その年がボランティア元年と言われていますよね。でもそれまでは、ボランティアをしていることをなるべく内緒にしていました。利用する人からも「周りの人に知られたくないから、なるべく遠くから来てください」と言われることが多かった。今はそんな話が嘘みたいですよね。素晴らしくなりました。

ー三角さんは長らく民生委員・児童委員を務めていらっしゃいますが、どのようなきっかけで始められたのでしょうか。

【三角】民生委員を務めて20年になります。実は昔、舅が町会長や民生委員をやっていました。舅が定年になり、一度はご近所の方にバトンタッチしたので

すが、その方も定年になったので私に打診が来ました。ちょうど子どもも大きくなって手が離れてきた時期で、そろそろ何か他のこともやってみたいなと思っていましたので、引き受けることにしました。息子の中には難聴の障がいを持った子もいますし、家族が多かったから高齢者に関することも少しは経験がありました。民生委員をやるにはちょうど良かったかもしれません。

ー長年の活動の中で、苦労されたことはありますか。

【三角】正直に言って、楽しい思いばかりで苦労話はありません。大変なことはあったのかもしれないけれど、苦労話と言えるほど思い出に残っていないのは、周りの方が良い人ばかりだったからですね。楽しく活動できれば長続きできるのかなと思います。
【相曾】ボランティアって嬉しいことがあると続きますよね。

ー次に、現在の狛江についてお聞きします。梶川さんたちが運営しているこまちの活動は比較的新しい活動になると思いますが、始めるきっかけを教えてください。

【梶川】私は学生時代から、地域に誰でも来られる集いの場を作りたいという思いがあり、たまたま親戚が所有していた空き家を借りて実現できたという経緯です。

三角 佐智子さん

狛江市民生委員児童委員協議会会長、狛江社協副会長を務めています。岩戸地域福祉推進委員としてお茶飲み会の運営や、岩戸地域のお囃子、「おはなしこまえ」という絵本の読み聞かせグループにも参加しています。

梶川 朋さん

「野川のえんがわ こまち」として、一軒家を週４日開放する活動をしています。また、高齢者や障がいをお持ちの方を訪問し、ちょっとした困りごとをお手伝いする活動もやっています。市民福祉推進委員や福祉のまちづくり委員、こまえくぼの運営委員も務めています。

立ち上げの準備を始めようとしたころ、ちょうど社協の福祉カレッジが始まり、これに参加したら地域の人と繋がれるかな、狛江のことを学べそうだなと思って参加しました。本当にたくさんの良い出会いをいただいて、こまちを立ち上げる弾みになりました。

ー梶川さんが活動をされる上で大切にしているのはどのようなことですか。

【梶川】こまちは事業所ではなく地域の人と一緒に作る場でありたいと思っています。週4日開放していますが、あまりプログラムは設けていません。皆さん自由にいらして自由に過ごしていいですよ、というやり方をしていると「こんなことはできますか」という話を持ち込んでくださる方がいます。それは子どもでも同じです。例えば、「野川の源流を知りたい」と言った子がいたので、みんなで自転車に乗って上流までたどってみようという企画をやったこともありました。また、この一軒家は雨戸をすべて閉めると真っ暗になるので、子どもたちから「お化け屋敷にしたら楽しいんじゃないか」というアイデアが出て、実際にみんなで装飾を作り、お化け屋敷イベントをやりました。子どもの発案を保護者の方や地域のおじさんおばさんが手伝って、一緒にやってみようということですね。まちづくりに参加しているというとハードルが高そうですが、自分の身近なところで面白そうだと思うことに参加できる、そん

な場のひとつになるといいなと思っています。

ー新しい活動が次々と狛江の中に生まれてきていますが、長年活動されてこられた相曾さんと三角さんにはどのように映っていらっしゃいますか。

【三角】岩戸のお茶飲み会では毎回歌や踊りなどの企画をやりますが、案外、来ている方々は単におしゃべりをしたいと思っている方もいます。だから今のお話を伺って、こちらで何でもお膳立てするのではなく場を提供する、という感覚は新鮮で、お知恵をいただいたような気がします。
【相曾】サロン野川も、当初からなるべくスタッフと利用者の線引きを曖昧にしようと決めていました。きっちり役割を分けるんじゃなくて、一緒にやることが大事じゃないかなと思います。
【梶川】そこは私たちも大事にしたいと思っていて、あまりスタッフと利用者さんを分けないようにしています。デイサービスに通いながら、ここにはお手伝いとして来てくださる方もいます。気軽にお客さんとして行ける場ももちろん必要だと思いますが、地域の一人としてお手伝いするときもある、いい意味で役割が曖昧な場でありたいなと思います。

ー上田さんはこまえくぼの運営委員をされている中で、狛江の地域活動をどのように見ていらっしゃいますか。

上田 英司さん

狛江市市民活動支援センター開設当初から８年間にわたり運営委員を務め、現在は運営会議会長として狛江の市民活動を支えています。市内の中学校のPTA会長、狛江市PTA連合会の会長もしています。

【上田】住民の人たちが、自分たちのまちをこんな風にしたいと思うことに取り組めるのが狛江の特徴だと思っています。こまえくぼには運営委員会がありますが、実は都内の同じような機能を持ったセンターすべてにあるわけではありません。運営委員会があることで、狛江では市民の人たちと一緒につくっていくことを非常に大切にしているのだと分かります。また、運営委員会での報告を聞いていると、「こんな動きがあります」「新しい団体ができました」という話が途切れません。自分たちができる範囲で小さく始められることも大きな特徴だなと思います。
【梶川】上田さんがおっしゃったように、小さく活動を始める方が多いのは特徴だと思います。「新しく法人を立ち上げました」「これから大きいことをやろうと思います」という方はあまりいない印象です。一人で小さく始めて、少しずつ応援してくれる人が集まっていくのが狛江の活動の特徴かもしれません。

ー本日のテーマは「“一人ひとりが主役となって、誰もが安心して暮らせるまち”を目指して」です。このテーマに対して、どのようなご自身の姿や生き方を思い描かれますか。もしくは、このテーマを実現するために狛江がどのような地域であってほしいかを教えてください。

【相曾】私が大事にしているのは、今できることを一生懸命やるということです。それだけで今までやってきました。
【梶川】その原動力は何でしょうか。
【相曾】90歳になったとき、何となくもう終わりだと思っていましたが、最近は、やっぱり楽しく生きている100歳じゃないと面白くない、頑張らなきゃという気分に変わりました。
【三角】狛江もマンションがたくさん建ってきて、だんだん都会っぽくなっていくのかもしれないけれど、緑があって、ほっとできるような場所があるじゃないですか。今ある良さをなくさないで、みんなが健康で元気に活躍できるまちだったらいいなと思います。

【上田】主役という言葉がありますが、主役じゃなくても、脇役や応援する役、見ている役でもいい。そこにいるだけでいいんだよと言える地域であることも大事だと思っています。それはどうやって実現できるかというと、周りの働きかけも必要です。社協などの組織が、あなたはそこにいるだけでいい存在なんだよと言ってあげられるようなまちであってほしいです。最初に相曾さんがおっしゃっていた「そこに座っているだけでいい人」という言葉がまさにそうだなと思って聞いていました。
また、最近はボランティア＝課題解決のように言われることが多く、何かを解決しなければいけない雰囲気になっています。でも本当はそんなことはなくて、活動すること自体に価値があるので、やりたい人たちに出番が用意されて、いろいろな価値に目を向けられるような文化・土壌ができるといいなと思います。
【梶川】主役という言葉は、まちの主役という意味もあるけれど、大事なのは自分自身の人生の主役となることだと理解しています。頑張ってまちのために動く方もいれば、ひっそりと自分のできることをする方もいる。その多様なあり方が認め合えるまちであるといいなと思います。そのためには、一歩踏み出して何かをやってみたいときに、失敗してもいいよと言える寛容さが必要だと思います。また、健康寿命が延びて皆さんが最期まで元気でいられることが一番良いですが、同時に、どうしても認知症になってしまう方、寝たきりになってしまう方もいらっしゃいます。そうなったとしても可能な限り自分らしくいられる、自分の弱さや失敗、傷ついた部分も見せることができて、それを認め合い、支え合っていくことができるまちであるといいですね。そうしたことが、一人ひとりが自分の人生の主役としてこのまちで生きていくことにつながるんじゃないかなと思います。

ー最後に、これからの狛江社協に期待することやメッセージをお願いします。

【上田】職員の皆さんには、ぜひまちに出かけて行って、住民と一緒になって動く存在でいてほしいと思います。
【三角】民生委員もいつでもお迎えします。お話があったらどんどん来てください。
【相曾】私は社協に育てられたと思っています。今の私ができたのは、社協のおかげです。
【梶川】私は、こまちの活動をフリーの社会福祉士としてやっている自負もあり、社会福祉を生業とする者の役割とは何か、常に自問しています。それを社協と一緒に模索し続けていきたい。一人ひとりが自分らしく生きられるまちをつくるために何ができるかを考える組織が社協だと思うので、そのために、これからも一人ひとりの市民と丁寧に向き合っていただきたいです。そして、半世紀の歩みの上に、時代の変化の中で柔軟に変わっていける社協であってほしいなと思います。

ー強い味方がたくさんいてくださって心強いです。本日はありがとうございました。

組織図・役員一覧

（令和6年12月現在）

≪ 理 事 会 ≫

会長	髙木 光
副会長	西山 偕子
副会長	三角 佐智子
常務理事	小川 みゆき
理事	秋元 遥
理事	石山 健一
理事	大久保 幸藏
理事	土岐 毅
理事	藤原 健次
理事	牧田 正之
理事	宗像 秀樹
理事	谷田部 茂
監事	鈴木 茂
監事	立崎 美香子

事務局

- 地域福祉課
  - 地域総務係
  - 相談支援係
  - 市民活動支援係
- サービス事業課
  - 障がい支援係
  - 早期療育係

≪ 評 議 員 会 ≫

評議員	秋元 惠子	評議員	稚田 千春
評議員	荒井 重昭	評議員	成川 佐智子
評議員	伊藤 聡子	評議員	松本 和美
評議員	市川 衛	評議員	松本 葉子
評議員	岩田 道夫	評議員	三竹 真知子
評議員	上遠野 秀夫	評議員	宮下 明子
評議員	門脇 由美子	評議員	物部 伸也
評議員	佐藤 まり子	評議員	谷田部 高史
評議員	田中 麗子	評議員	山本 和子

〈社会福祉協議会事務局の初代看板〉

10年のあゆみ

2015（平成27）年

- 中途失聴難聴者手話講習会の実施
- 低所得世帯学習支援事業「学習支援ステーション コマゼミ」の実施

2016（平成28）年

- 狛江市市民活動支援センター（こまえくぼ 1234）の管理運営
- 認定ヘルパー研修の実施

2017（平成29）年

- 「第３次地域福祉活動計画」を策定
- 社会福祉法人連絡会発足

2018（平成30）年

- コミュニティソーシャルワーカーを市内で初めて配置
- 福祉カレッジ開講

2019（平成31・令和元）年

台風 19 号による水害対応のため、狛江市災害ボランティアセンターを設置

〈災害ボランティアセンターの様子〉

2020（令和2）年

- 福祉のまちづくり委員会立ち上げ

〈第１期福祉カレッジの様子〉

2021（令和3）年

- 新型コロナウイルス感染症の影響による特例貸付

2022（令和4）年

- コミュニティソーシャルワーカーを市内全域に配置
- 認知症カフェ「KOMA CAFE +」開始

2023（令和5）年

- 多世代・多機能型交流拠点ふらっとなんぶの管理運営開始
- 一般相談支援事業所開設
- チームオレンジ「cafe ひといき」開始
- 「こまぱく～食を通じたみんなの居場所～」開始

2024（令和6）年

- 第４次地域福祉活動計画を策定
- 法人化 50 周年

〈ふらっと なんぶ外観〉

To be continued...

あとがき

本記念誌の作製にあたり、インタビューや取材において延べ30名以上の方にご協力をいただきました。残念ながら載せきれなかった関係団体・関係者の方もたくさんいらっしゃり、改めて多くの皆様のお力添えによって50年を歩むことができたことを実感しました。

インタビューをさせていただいた皆様とお話しする機会は日頃から多くありますが、活動や地域に対する思いをじっくりと伺う機会はあまりなく、熱い言葉の数々に胸を打たれ、身の引き締まる思いです。この熱い思いを次の50年、100年につなげるべく、狛江社協として何ができるのかを考え、行動してまいります。

狛江社協のすべての事業は、市民の皆様のご理解・ご協力なくして行うことはできません。だからこそ、一人ひとりと向き合い、寄り添って、ともに歩む存在でありたいと考えます。これからも、目まぐるしく変化する社会の中で取り残されている人はいないだろうか、時代に合った取組みができているだろうかと日々考え、事業に取り組んでまいります。引き続き、皆様のお力添えをどうぞよろしくお願いいたします。

令和６年12月発行

社会福祉法人狛江市社会福祉協議会

〒201-0013 東京都狛江市元和泉２－35－１あいとぴあセンター内

電話：03-3488-0294　FAX：:03-3430-9779

Tiojima
最大料金
無印良品
500
1,800
30
220
30
110
しまむら
IN
OUT

“一人ひとりが主役となって誰もが安心して暮らせるまち”をめざして